

「たわむれ たくらみ しかえし」

——『楽しい知識』に添えられたニーチェの詩の翻訳の試み——

河 内 信 弘

はじめに

『楽しい知識』には序文の後に「たわむれ たくらみ しかえし」と題された詩がおかれ、最後に付録として「プリ
ンツ・フォーゲルフライの歌」が収められている。後者はすでに翻訳を終えているが、『城西人文研究』第十八巻第
二号)、ここに前者を訳出するものである。

『楽しい知識』のために

題 詩

わが家に住み、誰も、なにことも
ただの一度もわたしは模倣しなかった
そして——自分を笑い飛ばすことのなかった
いかなる大家も笑い飛ばしてきた

わが家の門扉に

たわむれ、たくらみ、しかえし
ドイツ押韻の序曲

招 待

いかがです、わたしの料理をためされては！
明日になればきっともっと美味しくなる、

あさってなればきつと最高にいい！

さらにお望みとあらば——前につくった七つの料理は七つのあたらしい勇気をわたしに与えてくれる。

幸 せ

探すことにうんざりしてからは

見つけることを覚えた。

風が私に逆らうようになってからは

あらゆる風に帆を掛けるようになった。

おびえることなく

立っているその下を深く掘ってみるといい。

底からきれいな水が湧いてくる。

「底は『地獄』に決まっている」

鈍重な連中にはそう言わせておけばいい。

ふたりの話

A

病気だったのかな？ おれは直ったのかな？

ところで医者は誰だったんだ？
どうしてみんな忘れちゃったんだ！

B

もう直ったのさ。

忘れられたんなら、健康のあかしじゃないか。

有徳の人に

われらが徳ある人も足も軽やかに歩を進むべし！
ホーマーの詩のように軽やかに来たりて、
軽・や・か・に・去・る・べし！

世渡りのうまさ

見晴しのきく平野にとどまるな！

高すぎるところへは出るな！

適当な高さから見る世界

それがいちばん。

私とともに——君とともに

誘い出すのがわたしのやり方。

わたしについてくる気かい、追ってくる気かい？
きみは自分を誠実に追ってごらんよ。

—— ゆっくり！ ゆっくり！——それがわたしについてくることさ。

三度目の脱皮

もう皮膚が反り返り、裂けてくる

大地を噛み碎いてずいぶ喰らってきたのに

もう別の新しい衝動にかられ

おれの中の蛇は大地を求めている。

もう石と草の間に這い出し

腹が減って身をくねらせ

今まで喰らってきたものを喰らおうと

蛇の喰らうものを、大地を、貴様を喰らおうとする。

私の薔薇

ああ！ わが幸せは——ひとを幸せにしようと意志する——

幸せというものはすべて、そう、ひとを幸せにしようと意志する！

きみたちはわたしの薔薇を摘み取りたいとお望みか？

岩と茨の茂みの間に

身をこごめてもぐりこまなければならない

しばしば可愛い指の傷の血をなめなくてはならない。

なぜならわが幸せは——嘲笑を愛する

なぜならわが幸せは——悪巧みを愛する

きみたちはわたしの薔薇を摘み取りたいとお望みか？

転倒する者

たくさんのものを、ひっくり返し、転がしてきた

だから君たちは転倒するものとわたしを呼ぶ。

あふれてこぼれる杯の酒を飲むものは

たくさんのものをひっくり返し、転がす

だからといって酒が悪いとは思っていない。

決まり文句は言う

優しさと厳しさ、優雅と荒々しさ

馴染んだものと奇異なもの、清潔と不潔

賢と愚の逢い引き。

これらのものはみなわたしであり、わたしでありたい
鳩でありたい、蛇でありたい、豚でありたい。

光の友に

視覚と感覚性を傷つけたくなかったら
影の中に入って太陽を追って走るがいい！

踊るもののためには

滑らかな氷は

天国

上手に踊ることのできるものにとっては。

誠実な男

好ましいのは、張り合わせの友情より
一本まるごとの敵意！

錆

錆も必要！ 鋭いだけでは不十分！ さもないと
君は必ず言われる「こいつは若すぎて！」と。

上へ

「どうやったら山に一番うまく登れますかね？」
ひたすら登ること！ 登っていると考えないこと！

乱暴者のモットー

断じて乞うな！ 泣き言を言って乞うな！

君に乞う、奪い取れ、奪い取り続けよ、と！

やせたところ

やせたところは嫌いだ。

やせたところにはだいたい善も悪も入る余地がない。

こころならずの誘惑者

ひまつぶしに彼が空中に空っぽのことばを
放り投げたら——なんと、落ちて女に刺さった。

検討してみても

一つの苦痛に耐えるより二つの苦痛に耐えるほうが

楽なもの——思い切ってやってみては？

傲慢不遜

身を膨らましてそう威張りなさんな——そんなしていると針のほんのひときで君は本当に破裂するよ。

男と女

『おまえの心に触れる女がいたら、奪うがいい』
そう男は考える。女は奪わない、女は盗むのだ。

説き明かす

わたしは自分を開く、それは自分を閉ざすことなのである。
わたしはわたし自身を説き明かすものではない。
しかしながらひたすら自分の道を登るものが
わたしの姿をさらにあかるい光のもとへと運こんでゆく。

ペシミスト——薬

なにもうまいものはない、と嘆くのかい？
あいもかわらず昔のままのふくれっ面かい？

君はののしり、騒ぎ立て、ぺっとツバを吐く――

それを聞くとわたしの辛抱も勇気も碎ける。

友よ、わたしについて来い。

遠慮はいらない、ぶよぶよの蝦蟇を飲みこむことだ

一気に、詮索なんかするな！

そうすれば消化不良をおこすものか！

願っていることを

おおくの人のところをわたしは知っている――

それなのに自分自身が誰であるか、わたしは知らない！

わたしの目はわたしにあまりにも近過ぎる――

わたしは、わたしが見たものでも、見ているものでもない。

わたしが自分自身からもっと離れることができるなら

わたしはこのわたしのためにきっともっと役にたつことだろうに。

たしかにわたしの敵ほどには離れてはいないけれど！

――あの親しかった友ももうあまりに遠くに行ってしまった――

せめて敵とわたしの真ん中にいてくれたら！

君たちは、わたしが願っていることを、推し量ってくれないか？

わたしの苛酷さ

わたしは百の階段をこえて行かなくてはならない。

高く登らなければならない、わたしは君たちの叫びを聞いてはいる

「あなたは苛酷だ！ わたしたちは一体石で出来ているのか？」と。

わたしは百の階段をこえて行かなくてはならないが

誰ひとり階段であろうとは望まない。

さすらい人

「もう道もない！ あたりは断崖、死の静けさだ！」――

それを望んだのはおまえだった！ 道をそれたのはおまえの意志だった！

今こそ、さすらいものよ！ 今こそ冷静に、はっきりと見るのだ！

おまえが自分はまだだと思いこんだら――あぶない。

初心者のために慰めを

騒ぐ豚に取り囲まれながら、助けてくれる人もいないので、

つま先立ちで伸び上がっている子供を見るがいい！

泣くことはできる、でも泣くことしか出来ないでいる――

立つことだって歩くことだって子供はもう知っているだろうに？

怖がるな！　そうすりゃ、すぐに踊ることもできる。
踊る子供の姿を君たちはすぐに見られる、そうわたしは言いたい。
子供はなんとか両足で立てるようになりさえすれば
逆立ちだって出来るようになる。

星のエゴイズム

自分自身の回りではなく、丸い転がる樽の回りに
自分を絶えず転がさなくては
灼熱の太陽を追いかけながら、身を焼かずに
どうしてたえられるというのか？

もっとも近しいもの

もっとも近しいものがそばにいることはわたしは好まない。
高く、遠く放りだせ！　そうしなければ、
もっとも近しいものがどうしてわたしの星になれようぞ？

身を偽った聖者

あなたの幸せが私どもを押し潰さないように
あなたは悪魔のするさと悪魔の洒落と

悪魔の衣装を身にまとわれる。

しかし、無理と申すもの！ あなたの眼差しから

賢しいものが覗いておりまする！

奴隷

A

なんで道を誤ったか？ 男は立ち止まり、耳をすました。

耳のそばで聞こえたのは何だったのか？

男を打ち倒したのは何だったか？

B

いちど鎖につながれたものは誰でもそうであるように

——鎖の触れ合う音が——どこでもいつでも聞こえてくる。

孤独な者

ついて行くのも、率いるのもわたしは嫌いだ

服従？ ごめんだね！ 支配——とんでもない！

自分に恐れを抱かないものが、だれを恐れさせることができるというのか。

恐れさせることができるものだけが、他のものたちを率いることができる。

自分自身を率いていくのがもう嫌になったのだ！

山の獣や海の獣のように、よい時にしばらく我を忘れ
愛らしい惑いのなかにうずくまり

ついには遠くから私を家へとおびき寄せ

自分自身を自分自身へと誘う——それが好きなのだ。

セネカと仲間

耐え難くも聡明なくだらぬことを書いて書いて

まず書いて

つぎに哲学するともいうように。

氷

そうだ！ ときどき氷を作ろう。

氷は消化の役にたつ！

君たちがたくさん消化したかったら

わたしの氷をいかに好きになるかだ！

少年向き書物

わたしの思慮分別の初めのAと終わりのOがここで聞えた。

それは私がかつて聞いたものだった。

今はもうそうは聞こえない

ただ永遠のため息のAであり、永遠の驚きのOだ！

若いときのAとOがまだ聞こえてはいるが。

用心

あのあたりに行くのは今はやめた方がいい

心を持っているなら、用心に用心を。

あれは狂信者たちだ、そこはいつだって心が欠けている

君は誘われ、愛され、ついにずたずたにされる。

敬虔な人は言う

神はわれらを愛しておられる、神はわれらを造りたもうたのだから。

ところが君たちは繊細な人たちにこう言う——『人が神を造った！』

ところで自分が造ったものを人は愛してはならないのか？

自分が造ったので否定しなければならぬのか？

そいつは足を引きずり、足には悪魔の蹄だ。

夏

額に汗して

パンを食べなくてはならないのか？

賢明な医者言葉に従えば

額に汗するならむしろ食べない方がよいという。

なにが欠けているか？ と天狼星はきらめく。

天狼星の燃えるきらめきはなにを望んでいるのか？

額に汗して

酒を飲まなければならない。

嫉妬を抱かず

あの男は嫉妬を抱かず見る。それゆえ君たちは尊敬するか？

あの男は見回すけれど、それは君たちの尊敬を求めているではない。

あの男は遠くを見る鷹の目もっている

君たちを見てはいない！——あの男は星だけを、星だけを見ている。

ヘラクレイトス主義

この世の幸せは、友よ

戦によって与えられるもの！

友となるためには、そうさ

砲煙が必要さ！

三つで一つが友というもの

苦しみの前では兄弟

敵の前では味方

死神の前では——解放されたもの！

洗練されすぎたものたちの原則

四つん這いになるなら

つま先だって！

開けっ放しの扉から入るなら

鍵穴から！

忠告

名声をえようとしたことが君はあったかい？

そうだったらこの言葉を心に留めるといい。

時が来たら遠慮なく捨てること

メンツなんてものを！

徹底的な男

探求する男だって、わたしが？ おーお、そんな言葉はごめんだ！——

ただ重いだけ——そりゃ、かなりの重さだ！

落ちて行く、どんどん落ちて行く

ついに底まで落ちて行く！

永遠に

『今日行く、それが今日わたしにとってよいから』

行くものは誰でもいつでもそう考える。

『君は行くのが早すぎる！ 君は行くのが遅すぎる！』

そんな世間の無駄口はどうでもいいじゃないか。

疲れたものたちの考え

太陽をのしるのは疲れたものたちだ。

疲れたものたちにとって木の価値は——影——だ。

没落

『あの男は沈むさ、そろそろ落ちるさ』——時々思い出したように

馬鹿にする。本当は——あの男は——君たちのもとへ下りてくるのだというのに。

あの男のあふれる光りは君たちの闇を追いかけ

あふれる幸せはあの男にとって不幸となった。

定められたものに向かい合う

今日というこの日から山羊の革紐に結ばれて
時を打つ時計がわたしの首にさげられている。

今日というこの日から星の巡りも

太陽の巡りも、鶏の鳴き声も、影法師もとまり

これまでわたしに時を告げていたものが

いまは口をつぐみ、耳をふさぎ、目を閉じた――

あらゆる自然が黙して語らず

定められたものの刻みと時の刻みとが聞こえてくる。

賢明なもの言う

民衆に疎遠に、しかも民衆に役に立ち

ときに太陽、ときに雲となり――民衆をたえず超え

わたしはわたしの道をゆく！

頭を失った

いま彼女は精神を得た――精神を見つけたのはどのようにして？

つい最近ある男が彼女に迷って分別をなくした。
迷う前の男の頭は思想ゆたかだった！

男の頭は悪魔のところへ——いや、いや、女のところへ！

ご立派な望み

「カギなんぞみんな

さっさと飛んでなくなれ！

この合鍵が

どんなカギにも合うといい！」

合鍵のような奴は、誰でも

いつでもそう考える。

足で書く

書くのはわたしの手だけではない。

足も書き手といつも一緒であろうとする。

あるときは野を、あるときは紙を

しっかりと、自由に、大胆に、足は走る。

『人間的な、あまりに人間的な』ある一冊

おまえが背後を見ているときは、憂鬱にたじろぐけれど
おまえが信じている未来を信じてもいる。

おい、おまえは驚の仲間か？

それとも技芸の女神のお氣に入りか、知恵のふくろうか？

わが読者に

丈夫な齒と丈夫な胃と――

読者にわたしは望む！

わたしの書いたものに耐えられたら

あなたはわたしときつとうまくゆく！

レアリズムの画家

「自然を忠実に、あるがままに！」さあ画家はどうはじめる？

自然が絵の中で片がついたことなど今まであったらうか？

世界の極小の部分でさえ無限である。

結局描かれるのは画家の氣に入ったものだけ。

何が氣に入るのか？ 画家の描けるものだけ！

詩人——虚栄

さあ、ニカワを！ くつつける木材は
自分で見つけてもう用意してある。

四つの無意味な脚韻に意味をのせる

——それはそう捨てたもんじゃないさ！

えり好み

自由にわたしに選ばせていただけのなら

エデンの園の真ん中の席を

選ばせていただくか。

もっと願わくは——エデンの園の門の外を。

まがった鼻

鼻は逆らってあたりを見回し、

鼻孔をふくらませ——

だから、角をなくした犀よ、おまえはつんのめり、

わたしの自惚れたこびとはいつも前へ放りだされる！

そこでもいつも一緒というわけだ

曲がった鼻とまっすぐな誇りと。

ペンがひっかかって

ペンがひっかかって、ええ、畜生め！

ひっかかるように呪われているのか？――

それならインク壺から

濃いやつをたっぷりと。

ペンはよく走り、インクもたっぷり、字は太い！

ペンの運ぶままに、すべては思いのままに！

だが、字がはっきりしないじゃないか――

それがどうした？ わたしの書いたものを誰が読むというのか？

高き人

あの人は登って行く――あの人は誉めるべきである！

だが、あの人はいつも上からおりてくる！

あの人は称賛から解放されて生きている、

あの人は高みの人である！

懐疑派の語る

君の人生の半ばも過ぎ

時計の針は進み、君の心は震えている！

長い間あちこちとさまよい、さがし歩いたが

見つからなかった——ここでもなをためらう？

君の人生も半ばを過ぎた。

人生は苦痛と誤謬と、この世で時に時を重ね。

君はまだなにをさがす？ なぜをか？——

それがわたしのさがしているもの——理由のその理由を。

この人を見よ

そう！ わたしはどこから生まれたか、知っている！

炎のように飽くこともなく

わたしは燃え上がり、燃え尽きてゆく。

わたしが捕らえたものはごとごとく光となり

わたしが捨てたものはごとごとく炭となる。

炎である、たしかに、このわたしは！

星——道しるべ

あらかじめ定められた星の軌道を歩むがいい
お前に、星のお前に、闇なぞなんの関係がろうか。

この幸せに酔いながら時をつらぬいて行くがいい！
時の惨めさなどお前には縁もなく、遠いもの。

お前の光りははるか遠い世界のもの。

同情はお前には誤り。

純潔であれ！ それがお前のたった一つの戒律！

座右の銘

この「聖なる一月」によせる

あなたは炎の槍をもって

わたしの心の氷を突き砕いてくださった

おかげでわたしの心は踊るように

この上ない希望の海へと急いで行く。

ますます明るくなり、ますます健康になり
愛に満ちた必然のなかにあつて自由になつた――
だからわたしの心はあなたの奇跡をたたえる
たえようもなく美しいこの一月を！

一八八二年一月 ジェノヴァにて

後書き

*

この「たわむれ たくらみ しかえし」の対となるべき「プリンツ・フォーゲルフライの歌」を訳してからすでに十数年がたったいた。その後「ディオニュソス頌歌」「ツアフトウストラの歌」を訳して『城西人文研究』に発表してきたが、しだいにニーチェそのものから離れて、ニーチェを中心とする比較文学の領域に身を移していた。

日本の詩人、作家がニーチェをどのように読んでいたかという問題である。とりわけ萩原朔太郎の問題はわたしにとってはやくから興味を抱いていたものであった。そして、その問題にはじめて踏み入ったのであった。それは、偶然、朔太郎研究者の側からニーチェに踏み込む研究はほとんどなく、ニーチェ研究者の側から朔太郎に踏み込む研究もほとんどなかった時でもあった。その幸運もあって、『国文学解釈と鑑賞』の二十年ぶりの朔太郎特集号（第六七巻八号 平成十四年八月 至文堂）に執筆する機会が与えられた。

しかしながら、ニーチェ研究者として忸怩たるものがあつた。せめてニーチェの詩集の翻訳を出版出来たらという

願いはあった。それも夢に終わるかも知れないと思っていた。

ところが思いがけず書肆山田の鈴木一民氏にお会いする機会があり、氏に既に翻訳を終えたものを預けることができた。一年、あるいは二年後であったか「堪能しました」という言葉とともに出版しようという返事が返ってきたのである。そのときにはもうニーチェの詩はすべて訳し終えていなければならなかったが、雑用に紛れてニーチェから一層遠ざかってしまったというのが、現実であった。

この時間の空白がよかったのであろうか、ニーチェとの距離を置くことができたということであらうか、「たわむれ、たくらみ、しかえし」を訳しながら、ニーチェの呼吸を感じながら、訳すことができたのである。その呼吸を日本語にしてみようとしてみたけれど、ただニーチェの呼吸に合う訳であるかは分からない。ドイツ語と日本語にたがりは歴史的にも現実にも、どこにもないからでもある。

しかし、それは決して楽しいものではなかった。むしろ苦しいものであった。

身を膨らましてそう威張りなさんな——そんなにしていると

針のほんのひとつきで君は本当に破裂するよ。

後にトリノの広場で鞭打たれる馬を見て発狂したことを思えば、これが他へのイロニーではなく、自分自身への哀しいイロニーであることを知らされるのである。

「もう道はない！ あたりは断崖、死の静けさだ！」

それを望んだのはおまえだった！ 道をそれたのはおまえの意志だった！

おまえが自分はもうだめだと思いこんだら——あぶない。

これは自分を発狂へと追い詰めて行ったニーチェ自身の姿以外のなにものでもない。

*

さあ！ ニカワを！ くつつける木材は

自分で見つけてもう用意してある。

四つの無意味な脚韻に意味をのせる

——そう捨てたものじゃないさ！

そうニーチェが自負して歌ったように韻は見事に踏まれている。しかし、その見事さを分かって、わたしには味わう力はない。拙稿「ツアラトゥストラの歌」『城西人文研究』第26卷二〇〇〇年）の後書きに記したように、ニーチェの詩の朗読は実にテンポが速く、耳から入る詩でもある。そういう詩でもある。

「ドイツ押韻の序曲」と自負するけれど、苦痛に満ちたニーチェの自負であった。それはニーチェ自身が認めている通り虚勢と背中合わせのものでもあった。

ペンがひっかかって、ええ、畜生め！

.....

だが、字がはっきりしないじゃないか！

それがどうした？ わたしが書いたものを誰が読むというのか？

そのような悲しみを抱きながら、高揚する自己を友として手を取りあいながら、一人で二人となって生きて行く覚悟を定めたのである。

「あらかじめ定められた星の軌道を歩め」と自己に命じ、「必然のなかにあつて自由になつて」生きようとするのである。

ニーチェは一八八二年一月に『楽しい知識』第四書の最初にこう記した。

「新しい年にあたつて。――まだわたしは生きている、まだわたしは考えている。なお生きなければならない、なぜならわたしはなお考えなければならないからである。我あり、ゆえに我思う、我思う、ゆえに我あり。今日はだれもが自分の希望を、最も愛する思想をあえて述べる日である。そこでわたしも、今日私自身が希望し、いかなる思想がこの年わたしの心を走りぬけて行ったか記してみよう。いかなる思想がわたしのこれからのすべての生活の根底であり、支えるものであり、快きものであらなければならないか。わたしはものごとにおける必然的なものを美しいものとして見ることをこれからますます学んで行きたいと思う。そうすればものごとを美しくする存在のひとりとわたしはなるだろう。運命愛、これがわたしのもっとも愛するものとなる。」

使用テキスト

Friedrich Nietzsche "Sämtliche Gedichte" Manesse-Verlag, Zürich, 1999, hrsg. von Ralf-Rainer Wuthenow

参考文献

Friedrich Nietzsche Gesamelte Werke, Musarionausgabe, München, 1929, Bd. 20: Dichtungen, hrsg. von Friedrich Würzbach

Nietzsche Werke, Walter De Gruyter, Berlin, 1968, hrsg. von G. Colli und M. Montinari, Bd. VI-1

『ニーチェ全詩集』人文書院 東京 昭和四十三年 秋山英夫 富岡近雄訳

『ニーチェ全集』(第十卷) 白水社 東京 一九八〇年 永上英廣訳

『ニーチェ全集』(第八卷) 理想社 東京 昭和四十四年 信太正三訳